

信不具足

涅槃經の文(その二)

聖人は更に、涅槃經の迦葉品より二文を引いて、信心為因と信不具足を説きたもうのである。曰く、

「又言わく。或は阿耨多羅三藐三菩提を説く。信心を因と為す。是の菩提の因、復無量なりと雖も、若し信心を説けば則ち己に摂尽しぬ、と。己上

又言わく。信に復二種あり、一には聞従り生ず。二には思従り生ず。是の人の信心、聞従りして生じて、思従り生ぜず。是の故に名づけて信不具足と為す。復二種有り、一には道有りと信ず。二には得者を信ず。是の人の信心、唯道有りと信じて、都て、得道の人ありと信ぜざらむ。是を名づけて信不具足と為すといへり。(己上抄出)」

唯これ弥陀の願海

我らは、御本典信巻の、しかも信樂積の文において、再び涅槃經の文に接するのである。しかしてこの涅槃經の文の次には、更に華嚴經の文が出されてある。まことに釈尊一代の藏經は、初頓の華嚴にはじまって、その入滅を説ける涅槃經に終わるのである。今、大無量壽經の他力の大信を説かんとして、最初、最終の二經を挙げられることは、祖聖の教学の規模を語るものである。

憶うに、吉水の上人は、一代藏經を讀破しつつ、これを捨てて、偏依善導一師と、念仏一門に生きられた方である。したがって、その選択本願念仏集には、浄土の三部經¹及びその釈文以外には、多く引きたまわなかつた。しかるに親鸞聖人は、その捨てられたる一代藏經を捨て、これを念仏一門の中に融会して、自家葉籠中のものとせられたのである。二師の態度は根本において、相反するが如くである。

然れども法然上人の如く、全てを廃立して、純粹行を提示する者無くば、真に救われることは出来がたく、祖聖の如く、念仏行の中に一切を撰取するのなれば、真に教主釈尊の教旨はわからない。

廃立即ち教相判釈なくしては、信心は確立しないし、廃立もついに、真の意味を持たないであろう。祖聖は、大藏經の三部經を讀まれたのでなくして、三部經中の大藏經を讀まれたのである。即ち弥陀本願の大信に立脚すれば、一代經全て、南無阿彌陀仏の内容に過ぎないのである。涅槃經の信心論も、華嚴經の信心論も全ては、他力大信を説ける文字に外ならない。否、全ての仏、菩薩の足跡は、悉く法藏菩薩の血潮の流るる所に外ならないのである。我らは、小乗、大乘、聖道、浄土の一切を六字に揚棄しおおせる祖聖の巨腕を讃仰せざるを得ないものである。本文に移る。

信心為因

「又言わく、或は阿耨多羅三藐三菩提を説く。信心を因と為す。是の菩提の因、復無量なりと雖も、若し信心を説けば即ち己に摂尽しぬ。」

阿耨多羅三藐三菩提即ち菩提を得るの因は信心である。これ涅槃經の所説である。聖道門によれば、仏果菩提を得るの因は無量であるが、若し信心を説けば、信心の中

に無量の因は内含するのである。憶うに、信心正因を高調せる祖聖の教証はここにあるのである。しかして他力廻向の信を獲証せられたる祖聖は、又涅槃經の眞意を誦める人である。大經の教説を涅槃經に反映することによって、信心為因の確信をより深めたもうたのである。

仏教全て、一として信心を沙汰せぬものはない。しかし、信心を絶対の立場にあげ、唯信独達、天地間、唯信心のみにて足れりとの断定は、実に祖聖を以て最初とする。しかして聖道諸經の説ける信心も、念仏の大信に至つてはじめて、如実に衆生のものとなること、今や一代藏經行くところ可ならざるはなき、祖聖の信心海の風光の広大に驚かざるを得ない。他力の信、大經の信、涅槃經の信、信心に何で変わりがあろうぞ。愚禿が信も、諸仏の信も、いやしくも「信」は仏性である。涅槃と同質同性、如来心の因相ではないか。一切の徳を具するはもちろんである。

聞と思

「又言わく。信に復二種有り、一には聞従り生ず、二には思従り生ず。是の人の信心、聞従りして生じて思従り生ぜず。是の故に名づけて信不具足と為す。」

涅槃經によつて説かれる、信不具足の一文である。もし信心が聞くことのみに行っているならば、信心は完全ではなくて不具足だと言うのである。由来仏教は、教えに對して衆生の上におこる、その獲得の相状を、聞、思、修と説く。聞とは、教法を聞くことであり、思とは、教法によつておこる思念である。修とは、聞思によつておこる如実の修行である。

食物を口に入れるは聞、これを咀嚼するは思、消化して体力とするは修である。如何に幾十年聞法するも、これを思念工夫、咀嚼玩味することなく、これを馬耳東風と聞き流し、嘔吐し瀉出し、あるいは高慢の腹を痛め、邪見の胃カタルの種にしたのは、如実の信心を成就することは出来ない。

我らの求道にして如実ならば、教主より聞く大法は必ず眼を内に転ぜしめ、その思念の天地に一大革命をおこすであろう。その初歩においては、聞と思とは決して一致するものではない。聞法深きに至つて、聞と思は完全に一致して、真に大法の前に五体投地し合掌信仰せしめ、聞思一如の信境を打開するのである。しかしてその信はよく、全人格に満入して三業に顕現し、純粹行を如実修行相応せしめるであろう。この時に至つて、我らは如来の全き撰取不捨を体感するのである。聞に終つて、何等の思にも行にも及ばざるが如きは、信不具足と言ふべきである。今や、この涅槃經の文を借りて、信の何たるやを示したもう祖聖の劳作、又尊ぶべき哉である。

得道の人

「復二種有り。一には道有りと思せず。二には得者を信ず。是の人の信心、唯、道有りと思せず、都て、得道の人有りと思せず。是を名づけて信不具足と為す、と。」

これ又、多くの求道者の誤る所である。道はありと思しても、道を得た人があると信ぜられないのは信不具足である。道を得たる人とは善知識である。これを無視しては、我が生活は成立しないという、無視することの出来ない人格である。もし今日

浄土門流にして、真に法然、親鸞二聖をまともに仰いだとすれば、果して宗門は今日の如くであろうか。もし禪門にして、真に達磨大師の人格を無視することが出来ない眼を持ったとしたら、蝸牛角上に争う管長選挙の醜状があり得ようか。

親鸞聖人には、眼前、法然上人あり、遠く聖徳太子あり、源信あり、更に善導、道綽、曇鸞、天親、龍樹等の菩薩あり、ついに釈尊あり、これら絶対人格を三宝中の僧宝として絶対帰依したもうことを得たまえるが故に、本仏弥陀に絶対帰依したもうこと、炳乎として太陽に望むが如き信樂の天地に至られたのである。祖聖こそ実に身を以てこの涅槃経の文を体解したもうたのである。爛漫たる百花を捨てて春を尋ねるの愚に備えようとする、聖人の慈愛の施設を仰ぐべきである。もし人類文化、幾千万年、その間、一人の、かかる人格を知らないと言うが如き漫然たる生活をなす者あらば、墮落これより甚しきはなしと言うべきである。